

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1324
施設名	亀が岡りりおっこ保育園
施設所在地	東京都葛飾区東金町2-6-19
法人名	社会福祉法人 東中川会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

生き物の生と死

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

子どもたちが日常的に魚の図鑑や絵本に親しむ中で、生き物への興味関心が高まっていた。そこで、4・5歳児を対象とした水族館へのバス遠足や、全園児を対象とした移動水族館を開催し、生きている魚の美しさや躍動感（生）に触れる機会を設けた。さらに、6月にサケ、11月にブリの解体ショーを実施し、生き物が食材（死）に変わる姿を目の当たりにすることで、子どもたちが「命の尊さ」や「自分たちが生きるために命をいただくこと」を深く探究してほしいと考え、このテーマを設定した。

2. 活動スケジュール

4月～5月： 魚関連の絵本を購入し、生き物について学ぶ環境を構成。バス遠足（水族館）を通して「生」の躍動に触れ、興味を高める。

6月～10月： 6月にサケの解体ショーを実施。「かわいそう」という葛藤から命の尊さを学び、魚への関心からLaQで魚を作る活動やLaQ教室へと発展・深化させる。

11月～3月： 11月にブリの解体ショーを実施。移動水族館の開催（全園児）も交えながら、年間を通して「生と死」についての気づきを深め、食への感謝を確かなものにする。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

準備した素材・道具： 魚に関連する絵本・図鑑、解体ショー用の本物の魚（サケ、ブリ）および調理器具、LaQ（追加購入分含む）。

環境の設定： 子どもたちが自発的に生き物への理解を深められるよう、魚の絵本コーナーを充実させた。また、魚への興味が造形への意欲へと繋がったタイミングを見量り、LaQを自由に使える環境を整え、専門講師を招いたLaQ教室を開催して表現活動を支えた。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

水族館や解体ショーでの実体験、LaQによる表現を通じ、「生き物の生と死」を探究した。保育者は、解体ショーで子どもたちが抱いた「かわいそう」という素直な感情を否定せず、「このお魚の命をもらって、みんなが生きているんだよ」と丁寧に伝えることで、命をいただくことへの深い対話を重ねた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

水族館や移動水族館では「きれい!」「すごい!」と目を輝かせていた子どもたちだが、解体ショーで魚がさばかれる様子を見た際には「かわいそう」と声を漏らす姿が見られた。しかし、保育者との対話を経て、給食の時間には「お魚さん、命をありがとう」「残さず食べようね」と友達同士で声を掛け合う姿へと変化した。また、魚への興味からLaQで熱心に魚を作り上げ、「ここはヒレだよ!」と友達や保育者に見せ合いながら、生き物の体の構造を主体的に調べる姿が見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

午睡時間などを活用し、保育者間で子どもたちの言葉や表情について振り返りを行った。解体ショーでの「かわいそう」という言葉は、子どもたちの思いやりの心の表れであり、そこから「だから大切にいただく」という感謝（食育）へと繋げるプロセスの重要性を再認識した。水族館で見た「輝く命」と、解体ショーで直面した「命を捧げる姿」の両方を経験し、LaQで表現することで、子どもたちなりに『命の循環』を肌で感じ取っていたという気づきを得た。今後も子どもたちの心の動きに寄り添った命の教育を大切にしていきたい。